

『君の名は。（続編二次
）』①~奇跡をもう一度~
「絶対に瀧君を助ける！
」そこに現れたのは、、、

えー・あーる夢見

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作の『その後』の物語です。2人のラブラブなデートシーンなどはありませんが、プ
ロポーズ、結婚、親になる喜び。そして、瀧の死?!と、奇跡と絆、を描きました。

映画のネタバレも含みますが、もしも、こちらを先に読んだとしても、「さらに映画を
何度も見直したくなる!」内容になる様に努力しました。

この作品を、目に止めて頂き、ありがとうございます。

※目次には、あえて、表題を付けませんでした。

『ファンの皆様が喜んで下さるストーリー』これが何よりの 前書きです。

宜しくお願ひ致します

目

次

第1話	1
第二章	7
第三章	13
第四章	18
第五章	23
第六章	28
第七章	
第八章	
第九章	
第十章	
第十一章	
第十二章	
第十三章（最終話）	

第7話	34
第8話	39
第9話	44
第10話	53
第11話	58
第12話	61
第13章（最終話）	

第1話

(「ご」あいさつ」を含む、第一章)

※まだ映画をご覧になつていな方は、本編のネタバレ注意です。

ですが、もしもこちらを先に読んで頂いたとしても、何度も映画を観たくなるストーリーにしあげました。m（――）m

運命の再会を果たした瀧君と三葉。それから、、

この二次創作小説は、読者様がドッ普リと、思い入れにはまり、場面やBGMを心に思い描きながら、「三次脳内創作（映画）小説」として読んで頂きたいと思い、所々に、場面の説明や、情景解説を入れました。

なので、本当に映画を観ている様な気分で楽しんで頂ければ幸いです。

もしも、読者様の想いと相違がありましたら申し訳ございません。

その時は、皆様が希望される夢を描き入れてお楽しみ頂下さいませ。

『君の名は。』ファンの一人として、何よりも、この素晴らしい原作ストーリーと映画の存在に感謝致します、。

それでは、スタートです。

「真っ暗な画面に、瀧と三葉の声だけが、揃えて聞こえます。

「ありがとう！、君の名前は、？」

そんな言葉だけが響くシーンから始まります。（なぜ？また）で「君の名は。」に通じる言葉が？

このシーン、ちょっとだけ、心の片隅に留めておいて下さいね）

ここから、最初のBGMはもちろん『夢灯籠』が流れます。曲の間は、2人の入れ替わりが始まってから、巡り会うまでの映画の名場面が走馬燈の様に流れて行きます。

2人が、「君の、名前は、」と声をかけ合つたラストシーンで場面はストップ。
：「1年後」の文字：

森の中にたたずむ小さな白いチャペル、萌える緑の間から差し込む日差しが、天使達の放つ矢のように真っ直ぐに、何本も降り注いでいる。中ではそう、瀧と三葉の結婚式が静かに執り行われている。

三葉は、長い髪を結い上げながらアップにまとめて、髪の表面に、薄い水色に光るビーズを散りばめて、まとめた髪を下から支える様に、白い絹で出来た花をあしらつている。

肩を出したタイプのオフホワイトのロングドレスは、短めのヴェールの下から、後ろへと、2メートル程長く引きずるスカートが見える。「後ろに長く引きずるドレス」は、三葉の憧れであった。

その表面に、キラキラと銀色に輝くストーンが美しく扇状に広がり、豪華なラインをより引き立てている。

ヴァージンロードを歩いている姿は、まるで、光り輝く水の中を、銀色の人魚が、ゆっくりと長い尾ヒレを揺らしながら前に進んでいるかのような、美しい光景を魅せていた。

ただ、見た目に美しいだけではなく、今、この瞬間を、心から嬉しく感じ、喜びに溢れている三葉がまとう、幸せと感謝のオーラが、その場にいる人全ての眼に、そんな溜め息の出る空気を感じさせていた。

そんな「景色」を背後に、緊張しながら、父親と腕を組み、近づいて来る三葉を待つ瀧は、シルバーを貴重にしたタキシード。細身の長身に似合っている。

リハーサルの時には、「やつぱり瀧君つて、カツコええわー！イケメンモデルみたいやわ。」と、三葉が騒ぐのが恥ずかしかった、。

あの、彗星が落ちた日から再会まで、8年も経っているのに、三葉は瀧のことをいつも「瀧君」と呼ぶ。

まわりに人がいる時は瀧自身、「高校生のカツプルじやあるまいし、」と恥ずかしく思う事もあるのだが、本当のところ、年上の三葉に甘えられている気分もあって、少し嬉しかつたりもしている瀧。

でも、そんな風に思っている事は誰にも言つてない。

来賓席には、瀧の父親、そして数年前に、一葉お婆ちゃんが亡くなつてからは、父親と暮らしている四葉も出席。もちろん、一足先に結婚したテツシートサヤちゃんも祝福している。

神父さんが、「それでは、指輪の交換を。」

と言い、指輪の乗つたリングピローが運ばれて来る。

「あれ？」

瀧が、リングの横に2つ並べられた光る物に気が付く。

金と銀の紐で造られた組紐で出来た「ブレスレット」だつた。

「今度はずつと、同じ時間の中で持つていたくて、作つたんよ。」

三葉が瀧を見上げながら、顔を寄せて小さな声で囁く。瞳に涙を浮かべながら、でもその顔は、心からの幸せな微笑みで満たされていた。

指輪を交換して、組紐のブレスレットも付け合つて、誓いの口づけをする2人、。

教会の外で花びらのシャワーを浴びながら、祝福の鐘の音と共に、2人の幸せそうな

場面がシャツジャーを押された様に留まり、、

(さうに1年後)

チエストの上に飾られた写真立てに、幸せな2人の結婚写真が飾られている。それを祝福しているかのように、その隣の写真立ての中では、一葉お婆ちゃんが笑っている。

：あれからもうすぐ1年が経とうとしていた。

驚いたのは、以外にも?!三葉の父親が、2人の結婚を喜び、孫の誕生を心待ちにしていることだ。

まだそのニュースはプレゼント出来ていないままだが、、

「おはよう」

毎朝のリズム。三葉に声をかけた後、真っ先に、トイレと洗面所に向かう瀧に、キッチンから三葉が明るく返事をする。

「おはよう、瀧君」

もう何回も聞いているのに、朝から心地よく、幸せな気持ちにさせてくれる声だ、と、瀧は思つた。

「またお父さんからのメールの最後に、『孫はまだか?』やて！全くデリカシーが無くていやや！」顔をしかめる三葉を面白そうに見て、瀧は、

「とにかく、俺たちの事を、お父さんが喜んでくれてているのは、ありがたいじゃないか、
ケータイまで新しくして、三葉の事を心配してくれているし。」

「しかも、いつでも孫の顔が、テレビ電話で見られるようになって、お店の人には、画面の
質の高い機種なんてお願ひしとるんよ。」

「私の事を心配しててるっていうより、逆にプレッシャーかけすぎやわ。」

三葉がグチをこぼしながら、出来上がったハムエッグを運んで来た時に、テレビから
聞こえて来たニュースに、瀧が注目した。

第二章

第2話

「今、ニュースでやつてゐるこの村つて、今度、うちが開発する山林の近くだ。」

「最近地震が頻発しているのか、」

瀧が心配そうに見ていた。

「そう言えば瀧君、近いうちに現地調査に行く予定なんやろ？ 瀧君が行く所に、地震が来なきやええけど、」

三葉も心配そうに言いながら、焼き上がつたトーストを持つてテーブルに運んでき
た。

朝食に、ハムエッグとトーストをメインに、コーヒー、紅茶を出すのも、三葉の描いていた「憧れの東京生活」の中の一つであつた。別に、瀧は、三葉の作る味噌汁が好きだつたし、ご飯と焼き魚でもかまわなかつたのだが、。

「あつ！、」

座ろうと、椅子を引いた時に、三葉がふらついた。

「だ、大丈夫か?」

瀧が素早く立ち上がり、後ろに倒れそうになつた三葉の腕をつかんだ。

「あ、ありがとう瀧君。何だか最近、調子が悪い時があるんよ。」

「遅くまで、仕事の書類とか、家に持つて来てまでやつてるだろ? ちょっと頑張りすぎじやないか? 一度、診て貰つたら? 会社の健診も受けてなかつただろ。」

「うん、そうやね。ちようど今日は、この前の休日出勤の振替やし、お医者さん行つてみる。」

「そうだね。気をつけて。あ、後で連絡して。」

そう言つて、三葉を心配する瀧。 時計を見て

「あ、もうこんな時間!」

慌てて朝食を済ませ、バタバタと支度をする。

玄関まで瀧を見送る三葉。

「行つてらっしゃい。早く帰つて来てね。」

「うん、三葉も、お医者さんに行く時、倒れたりしないように無理すんなよ。」

瀧が出かけた後、キッチンに戻り、三葉がテーブルを片付け終わる頃、いつも瀧が、会社に持つて行く鞄を置く、キッチンカウンターの下に、封筒が置いてある事に気が付いた。
「瀧君、忘れ物しとる。」

三葉は、すぐに瀧のケータイに連絡をした。

「もう戻ってる暇が無いんだ。悪いけど三葉、届けてくれる？ 昼まで良いんだ。午後に使う書類だから。」

三葉は、医者に行く前に、瀧の勤める会社まで、足を伸ばす事になった。

「やれやれ、」とも思ったが、前にも一度、似たような件で会社に行つた時、「立花さんの奥様」

と、呼ばれた事がちょっと嬉しかった事を思い出した。

瀧の勤務先は、大企業、と言った感じではないが、中規模なビルの中にあるため、1階のロビーで登録が必要だつた。

三葉が自分の名前や、瀧の部署について受け付けに話し、瀧がロビーに降りて来るのを待つ事になつた。
すると、

「宮水、さん？」

と、横から確認するように声をかけられた。

三葉がそつちを見ると、そこには、すぐには思い出せないが、どこか懐かしさを帶びていて、確実に会つた記憶が感じられる、

そんな、同じ年くらいの男性が立つていた。

「宮水さん、だよね？糸守の小学校で一緒だった。あ、俺、『初見（はつみ）』同じクラスの、」「あー！思い出したわ！！」

三葉は大きく目を開いて、初見を指差した。
「初見君、やろ？！懐かしいわあ。小学校以来やね？こんな所で会うなんて。元気にしてつたん？」

とりわけ、仲が良かつた訳ではないが、田舎の少人数の小学校だったこともあり、記憶に残っていた。

「初見君、もしかして、ここでお仕事しとるん？」

「いや、今日は用事があつて。今ね、俺、地質とか、地震とかのデータ研究や調査の仕事をやってて、土地開発をしている会社の依頼も受けたりしてるんだ。それで、今日はこの中の会社に、」

「凄い！初見君。確か、あの頃から、理科と、理科の実験が得意やつたよね？授業でよく手を挙げとつたの、覚えとるよ。」「ははは、得意ってワケじやないよ。ただ好きなんだ。宮水は、なんでここに？」

「あ、そのね、しゅ、主人が忘れ物して、届けに、。会社、このビルの中やから、」
瀧の事を誰かに『主人』と言つて話すのは、いつも少し緊張してしまう。
大抵は友達にも、未だに『瀧君』と言つていて、時々、瀧から注意される。

緊張しながらも、『主人』と言える事に、心の奥で幸せを感じているのも事実であった。

そんな会話の途中で、エレベーターから瀧が降りて來た。

「おー、ありがとう三葉。ごめんな、わざわざ、」

と、書類を受け取り、三葉の隣に立っている初見をふと見上げ、

「あれ？ 初見さん！ もういらしてたんですか？」 「ええ、少し早く着いちやつて、で
もお陰で、懐かしい友達と再会したよ。」

瀧が、隣にいる三葉を見て、

「懐かしい友達、つて、三葉の事ですか？ エツ、本当？」

「うん、初見君とは小学校の同級生でな、同じクラスだつた事もあつたんよ。私も
ビックリしたわ。」

「まさか宮水、いや、三葉さんが、立花さんの奥様だつたなんて、」

三葉は「ふふつ」と微笑んだ。

「初見君の方こそ、瀧君の仕事先でお世話になつたる人やつたなんて、すつゞい偶然や
ね！」

すかさず、瀧が小声で、

「三葉！ 人前で『瀧君』はよせつて!!」

「あ、ごめん」

「……すみません初見さん。三葉と知り合いなら、今度は、うちに飯でもいらして下さい。」「はい、ぜひそうさせて頂きます。」

瀧と初見と別れて、病院へ向かう三葉。

何だか嬉しい気持ちになり、今朝の気分の悪さも忘れていた

第三章

第3話

大学病院の内科。

いつたん検査の結果待ちになつた三葉。

診察室から出る時に、閉まる引き戸に、左手の指先を、少し挟んでしまつた。

「痛っ！、全く、我ながらドジ！」

： そう自分に呆れて、左手の指先をさすりながら、すぐ近くのイスに腰を下ろした。
さすつていた左手の手のひらに目が行つた時、三葉は、瀧と再会後に、もう一度、あの場所へ行つた時の事を思い出した。

付き合つて半年ほど経つたある日、瀧から

「もう一度、糸守に行かないか？」

と言われ、小旅行を計画した2人。

あの二つになつた隕石湖に向かい、歩いている、紅葉と緑と青空の、美しい景色は

そのままだ。

とても、この近くで、村を一つ飲み込む程の隕石が落下したとは思えない。

瀧が、木漏れ日に手をかざしながら言つた。

「時々さ、『あ、この景色とこの感じ、夢で見たかも、』なんて思う事、あるだろ？
三葉と付き合つてからは、余計に、三葉が話してくれる宮水の家の事とか、友達の
話とか、まるで自分が体験したみたいに、うなづける事があるんだ。

少しだけど、入れ替わつていた時の事を思い出せる様になつてからは、その感覚が、
益々ハツキリしてきた。

やつぱりあの奇跡は、ただの夢なんかじやなくて、本当に起こつた出来事だと思
う、」

そして、この美しい、動く日本画の様な景色を見渡して、

「三葉のお婆ちゃんをおぶつて、四葉と宮水の御神体まで行つた時は、俺が三葉と入れ
替わつていたんだ。

お婆ちゃんの話を聞きながら歩いたお陰で俺は、あの場所を知る事が出来たし、三葉
を助けたいつて思つた時に、あそこが奇跡を起こす特別な場所だつて、思えたんだ。」

「不思議やね、『思い』つて。

私ね、いつも思うんやけど、例えば、音楽つて、『空気に色をつける絵の具』みたい

なもんやなあ、つて。

仕事をしても、遊んでも、そこに音楽がかかっているだけで、楽しさが倍になつたり、逆に、悲しみも増したり、

その場の空気が、キラキラ輝く好きな色に感じたり、幸せな、柔らかいピンク色に見えたり、透き通るブルーに見えたり、

そんな『音楽に絵の具の力を持たせる』のも、一人一人の『思い』なんやろなあー。』
そんな話をする三葉の横顔を見つめる瀧。

「私が、大人になつて、初めて東京に出てきた時にね、眩しい街の景色が、懐かしく思えたんよ。瀧君になつて、東京で過ごした時のワクワク感がね、その時に街で聴いた音楽を聞くと、たどえ違う場所でも、蘇るんよ！」

瀧は、三葉の、こんな風に、おおらかに、ふんわりと自由に物を捉える考え方が好きだつた。

情報まみれのウルサイ都会ではなく、自然に囲まれた環境で育つたせいなのか？

三葉は、やたらと東京に憧れを抱き、都會を意識する所があるけれど、東京にドップリ浸かつたタイプの女の子でなくて良かった、とつくづく感じていた。

2人で、思い出せる限りの、入れ替わっていた時の話をしながら歩いた。

「体を触ったか？否か？」

『口噛み酒』の意味を知っていたのか？等々、

時に、三葉がプリプリと怒つたり、顔を真っ赤にして恥ずかしがるのを、瀧がからかつたりしながら、：。

空には、真昼の月が、顔を出していた。

「見て三葉、月がもう出てるよ。 三日月だね。

三葉、覚えてる？ 入れ替わっていた時の、学校のノートに、お前がメモした三日月の話、：。

「三日月？なんやろ、あ！また私、何か変な事を?!」

「ううん、違うよ。あのね、『満月よりも、私は欠けた三日月が好き。 だつてそこには、唯一、地球の影が映つて見えるから』って書いてあつた。」

「あ、確かに、そんな事を考えてた事、あつたかも、：」

三葉が、耳の脇の髪を、指でクルクルとねじるクセを出しながら、少し恥ずかしそうに思い出していた。

「あのメモだけは、なぜか忘れずに、心に残つていたんだ。

なんで、地球の影が映つて見えてるから好きなのか？ その理由は書いて無かつたから、三葉の感じ方とは違っているかもしれないけど、

俺は、その一文に『地球の大きさ』を感じた。逆に、人間の小ささも感じたから、それ以来、小さな事で悩みそうになつた時には、『くよくよするな！大きな地球で！』って自分を元気づけて来た、。

「良かった。私のメモが、瀧君の役に立つてたんやね。」

三葉が瀧の手を握り、2人は手を繋いで歩き続けた。

その感触に、瀧は三葉の存在の大切さを、改めて感じていた。

2人の前に、あの二つの隕石湖が現れた。

あれから数年が経ち、一部は、かなり近くまで行ける程、整備されていたが、まだま

だ災害の大きさを感じさせた。

しばらく、その景色をボー然と見つめる瀧と三葉、。

第四章

第4話

「、私、瀧君のお陰で、ここで新しい人生をもらえたんよ。、テツシー やさよちゃん、沢山の町のみんなも。」

三葉は、瀧の手を、更に強く握り、

「ありがとう」と、改めて言つた。

「あの場所へ行こう。僕らが初めて、同じ時間の、たそがれ時の中では会えた場所へ。」

「、更に歩き、あの、御神体を囲む、お盆状の丘の上に来た。

空はもう、三日月をくつきりと映し出し、丘を照らすオレンジやピンクのグラデーションから、ブルー、そして少し広がりかけた濃紺へと、夕空のシヨーを魅せていた。
ちようど、あの時と同じ、たそがれ時の光が、2人を包んだ、
(※ここからは、もちろん、BGM『スパークル』が流れます。)

「ここが最後だつた、」
「ここから、三葉の事が、記憶の奥にしまい込まれて、名前も思い出せないのに、どう

しても忘れられない誰かへの想いが始まつたんだ、。」

「うん、」

三葉も、皆を助けようと奮闘していた中で、瀧の名前を思い出せなくなつた時の悲しみが、再びこみ上げてきて、涙が浮かんできた。

「今度こそ、ちゃんと手に名前を書こうよ。」

そう言つて、瀧がポケットから、そーっと、ペンを出した。

「三葉、手を出して。」

三葉は、左の手のひらを差し出した。

「あ、目をつむつてくれる？、なんか、緊張するからさ。」

三葉は、クスリと笑い、目を閉じる。瀧が走らせるペンの先が、くすぐつたかつた。

「はい、次は三葉が書いて。」

三葉が、書かれた文字を見るより前に、瀧が三葉の手のひらを丸めてしまつた。
そして、三葉の右手にペンを渡す。

よく見ると、ペンの蓋のフックの部分に、光る物が付いている。

「何？、」

瀧が書いた文字を見る事無く、左手で、ペンからそれを取る三葉。

それは、銀色に輝くりングだつた。

、、リングの真ん中には、小さなブルーダイヤ、その横に、段々と大きさが小さくなつて行くデザインで、クリアーナブチダイヤが並んで3個、埋め込まれていた。

「キレイ!!彗星みたい！」

親指と人差し指で、リングをつまんで、空に透かして見るよう眺めていた三葉、ハツと気付き、さつき瀧が書いた文字を見ようと、リングをつまんでいる左手の、丸めていた小指、薬指、中指、と、順番にゆっくりと開いていった。

「結婚しよう

そこには小さな文字で、プロポーズの言葉が書かれていた。

ちょうど、開いた3本の指の根元に、丸めた時の指に隠れる様な場所に。

小さく書いていたせいで、三葉には書かれている時に、その文字が読み取れていなかつた。

「瀧君、」

文字を読んだ三葉は、言葉を失った。涙が止めどなく溢れて來た。

瀧が三葉の手からリングを取り、左手の薬指にはめ直した。

「……で、三葉にプロポーズしたかつたんだ。

三葉、俺と結婚してくれないか?」

改めて、瀧の口からその言葉を聞いた三葉は、ただ、嬉しさと感激で、泣きながら、両

手で口元を抑えて、瀧を見つめていた。

そして、左手の文字をもう一度見て、「もう、瀧君、これじゃあ又、名前覚えておけないわ。」と、涙を流しながらも微笑んで、リングを取った時に、ポケットに入れたペンを、もう一度取り出した。

「瀧君も手を出して。」

今度は瀧の右手の手のひらに、三葉が書き始めた。

「はい」

書き終えると、瀧の反対の手に、ペンを返した。

瀧は、ペンをポケットにしまいながら、三葉が書いた文字を見た。

瀧の瞳にも、涙が浮かんできた。

「よ、よろしくお願ひします。」

三葉は、少し照れながら、ぺこりと頭を下げた。

「これじやあ、俺だって、名前覚えられないじやん、」

三葉を見つめる瀧、

「もう離さない、三葉。」

「、瀧君、」

ちょうど、たそがれ時が終わろうとしていた。

その移り行く、静かな光と空気に包まれながら、いつまでも2人は固く抱きしめ合つていた、。

愛しく、美しい光景と共に『スパークル』のエンド部分が流れて行きます。

第五章

第5話

「立花三葉さん。」

看護師の呼ぶ声に、ハツと我に返った三葉。

その胸元には、あの『彗星のリング』にチエーンを通したペンドントが光っていた。『目まいの原因は、疲れとストレス。あと、もしかしたら、妊娠されている可能性がありますね。』

；； 1週間後に再度、この病院の産婦人科へ行く事になつた三葉。
薬局で待つてゐる間、飛び上がりたい気持ちだつた。

すぐに瀧に伝えようと思つていたが、思いとどまつた。

「1週間後の検査の結果を待とう。もしも、違つていたら？」
会いたい存在に会えなくなつてしまふ悲しさ、三葉の心に、そんな想いが横切つた。

「、今日の結果は、疲れからのストレスだつた。と、瀧君には言つておこう。」
自分に言い聞かせる。更に、

「あ、でも確か、来週は、瀧君が出張やわ。

もしも、嬉しいニュースだつたとしても、直接、合つて話せないんやね。、まあええやろ、ケータイのテレビ電話でも。

瀧君、嬉しくて、きつと飛んで帰つて来るやさ。」

そんな風に考えながら、何よりも自分が一番、ドキドキしながら1週間を過ごす三葉だつた。

「もう少し、長めの上着も、持つた方がええんちゃう?」

春だと言うのに、気温の変化が激しく、肌寒い日もある4月だつた。

瀧の出張の準備を手伝う三葉。

手伝う、とは言つても、瀧は、独り暮らしで自分の事をするのは慣れているので、三葉が横で、お節介をやいでいる様なものだ。

「そうだね。前日に立ち寄る取引先が用意してくれたホテルは、山の中だから寒いみたいだし。

しかも、そのホテルは、調査現場からは車で2時間くらいかかる所なんだつて。もう少し近い所に、ホテルを取つてくれたら良かつたんだけど。」

「ここから新幹線と車で、直接行くだけの仕事やつたら、日帰りでも帰つて来れたのになあ。」

ちよつと不服げな三葉。

「まだ周りも、建設中の山道が多くて、完全に舗装されていない道を避けて、遠回りしないとならしい場所も、何カ所かあるらしい。」

「お料理の美味しいホテ

ルだとええね。山の幸！」

「おい、旅行じゃないんだから。

でも、何か名物とかあつたら買つてくるよ。お土産、どんなのが良い？」

「お菓子がええな。一個ずつ包装されてるの。その方が長く楽しめるやろ。」

三葉は、お土産のお菓子を食べながら、嬉しいニュースを喜んで興奮する瀧の顔を想像した。

「：、どうか、良い結果が出ますように。：、」

「え？ 何か言つた？」

「別になんも。無事に帰つて来てね。」

「最近は、地震も収まつてゐる様だし、現場には初見さんも合流する予定だから心配ないよ。留守は気をつけてね。」

いよ。翌朝、早くに瀧は出かけた。

瀧を送り出したあと、三葉は、結婚写真の隣に置いてある写真立ての中の、一葉お婆

ちやんに手を合わせた。

「瀧君に、赤ちゃんの報告が出来ます様に。」

そう願つて、病院へと急いだ。

今度は大学病院の『産婦人科』の前にいる三葉。

お腹の大きな妊婦さんと一緒に座っているリアリティーが、ドキドキする気持ちをおつた。

「私も、仲間になれるんやろか、」

「立花さん、おめでとうございます！ 5週目です。」

5週目、がどれ程の事なのか？まだ専門用語にはピンと来なかつた三葉。

だが、「おめでとうございます。」と言われた事に、目の前がパーッと明るくなるのを感じた。

出産までに必要な書類や、説明を受け、産婦人科を後にする三葉。

早速、予定通り、すぐに瀧に報告しようと思つたが、また考えた。

「瀧君に報告するのは、明日、仕事が終わつて、こつちへ向かつて帰りの時間帯にしよう。」

浮かれた気分で、走り慣れない山道の運転とか、危ないやろうし、お楽しみは、後に

持つて行つた方がええよね、。」

こんな時は、瀧より3歳、年上で、2人姉妹の長女でもある三葉の、しつかりした部分が見える。

「明日の夕方から夜なら、瀧君も、帰りの新幹線に乗つてる頃やろね。」

三葉は、帰り道、「ふふふつ」とニヤケてしまふ自分の顔を、普通に保ちながら歩いていた。

第六章

第6話

翌日の夕食後、

「何て言いだせばええんかな？ ズバリ！ 言つちやう？ もつたいぶる？ クイズにして、当てるもらう？」

： そんな独り言を楽しみながら、ケータイを持つ三葉。

すると、突然、

かけるつもりのケータイに、見覚えの無い番号で、着信音が鳴った。三葉は、とりあえず、自分の名前は出さないで、電話に出てみた。

「はい？」

「あ、立花三葉さん、

瀧さんの奥様の電話でしようか？」

聞き慣れない男性の声。

「はい、立花の妻ですが。」

「急にお電話して、失礼します。」

：私、瀧さんと同じ課で仕事をしている杉田です。」

いつか、瀧君から聞いた事のある名前だ。怪しい電話ではなさそうだ。

：、「確認なんですが、瀧さんは、昨日から出張に出られてますよね？」

それから、今日は現場のある山の方に行かれる予定だつた事は、奥様はご存知だつた
でしょうか？」

：行かれる予定『だつた』、と言う言い方に、

不安がよぎつた。

杉田は続けた。

「今日、現地で合流する予定の、他の社の者から連絡がありまして、」

瀧さんが、時間になつても見えない、との事なので、」

：、「そんなはずは、家で準備をしている時に、現場周辺の事や、合流する相手の方の
お名前とか、話していたし、」

：、「どうか、落ち着いて聞いて下さい。」

まだニュースには出ていませんが、実は、現場の近くで、トンネルの天井が崩れ落ち
る事故があつたそうなんです。

現地で、今日、地震があつて、どうやら、瀧さんも、それに巻き込まれた可能性が高
いんです。」

「うそっ?!」

その先の言葉が出なかつた。

「まだ詳しい情報が入らないので、こちらも必死で連絡を取つています。

滯在していたホテルに問い合わせたら、瀧さんがホテルを出た時間が分かりまして、
そこから瀧さんが通りそうなルートをたどると、ちょうど、地震が起こつた時間の辺り
で、トンネルを通つていたのではないかと、と、。

他にも数台が巻き込まれたらしく、今は、警察や消防隊が、ガレキの除去と、人名救
助に必死なんですが、」

「主人に連絡は取れないんですか?!」

焦る三葉。

「何度も瀧さんのケータイに電話をかけたら、ホテルのフロント係が出まして、瀧さ
ん、いつ頃、何処でかわかりませんが、ホテル内で、ケータイを落としていたみたいな
んです。」

「そんな、じゃあ、どうすれば、?」

「あなたかが、フロントに届けてくれた時には、もう出た後で。」

不安に震え始めた三葉。

「これから、うちの社の者が、奥様を現地へお連れしますので、とにかく準備をしておいて下さい。

まだ希望はあります。

どうか、お気を確かに、。」

電話が切れた、。

最も幸せな話をするはずの電話が、最も自分を不安にさせる電話となつた、。ただシーンと、沈黙が続いた。

三葉の頬を、涙が伝い落ちる、。

「いや、：いややあああ、！」

ケータイを落とし、両手で顔を覆い、泣きじゃくる三葉。

準備どころではない。

その場にうずくまり、膝に乗せた両腕に、顔をうつ伏せて泣き続けた。

、まだ希望はある。きっと大丈夫、、

そんな風に気持ちを奮い起こそうにも、あまりの不安の大きさと重圧に負けてしま

う。

悪い事ばかりが、頭の中を駆け巡つて、言葉が溢れ出す、。

「なんで?! なんでやの?! こんなんウソや! 夢や! 悪い夢や!

イヤや! 絶対にイヤや! 瀧君が死んじやうなんて! いなくなつちやうなんて! 会えなくなつちやうなんて!

イヤや! イヤや! 絶対にイヤや!!

まだまだやつてない事が、いっぱいあるんよ。

話してない事が、いっぱいあるんよ。

瀧君がいなくちや、いてくれなくちや、生きる意味が無いんよ!

どうして? せつかくまた会えたのに、

今すぐ、ここに来て!

抱き締めて!

私だつて、抱き締めたいんよ! :

これからも、ずっと一緒にいようつて、約束したやない、:

瀧君、私ね、一番話したい事があるんよ。

私のお腹にね、:。

そのまま、三葉は、その場に倒れ込んでしまった。

「神様、お願い。

どうかもう一度、時間を戻して、瀧君が事故にあう前に、」

薄れしていく意識の中で、三葉は自然と、こんな願いを心に思い浮かべてかいた、。

第七章

第7話

ピンポーン、ピンポーン

インターほんの音で、目を覚ました三葉。

泣き腫らした目である事は、鏡を見なくとも分かった。
モニターを確認した。

「三葉さん！大丈夫ですが？！ 初見です！」

聞いて下さい。瀧さんが大変なんです！」

ついさつき聞いた話、あの悲しみ、あれは夢なのか？
それとも、今が夢なのか？まだハッキリしないまま、三葉は、
「は、初見君？どうしたの？」

「すぐに出かける用意を！理由は後で説明します！

早く！瀧さんを助けないと！！」

「瀧を助ける、」

その言葉に、すぐにケータイの日付を見た三葉。

「まだ朝?!、あの電話を受けた日の?!
じゃあ、あの話は夢?、、」

「分かった。上がつて来て!」

三葉は、マンションの入り口のロックを解除した。
すぐに顔を洗い、髪を縛り直した。

最低限の荷物をパツグに押し込んだ所に、初見が来た。

ドアを開けて、一瞬戸惑った様子の初見を、中に案内したが、

「いや、ここで話すよ。

今日、瀧さんと合流して仕事をする予定の地域で、かなりの確率で、地震の予兆が出てるんだ。

瀧さんに電話しても繋がらなくて、会社はまだ始まつていないし、
でも、今すぐに、始発の新幹線に乗れば、瀧さんに危険を伝える事が出来るかもしけ
ない。

すぐに出よう!』

三葉は、まだ、どこまでが夢で、どこが現実で、なぜ初見が自分を連れに、、など、
疑問も浮かばないワケではなかつた。

でも、とにかく夢中で初見と駅へ向かつた。

「飛び込みで、座席が取れて良かつた。

急に連れ出してごめん。三葉さん、大丈夫?」

ドタバタと始発の新幹線に乗り込み、ようやく席に落ち着いた三葉。

初見が用意してくれた飲み物で、いくらか気分も落ち着いた。

「パンも買つたんだけど、食べる?」

「ありがとう。、後でにするね。」

夕べの出来事が夢だったとする、じゃあ、瀧君は生きてるの?!

予知夢、みたいな物やつたの?あれば、?!

でも、今、初見君と一緒に瀧君を助けに向かつてゐる。もう夢かどうかなんてどうでもいい。

とにかく私は、必ず瀧君を助ける!!

三葉は、心を立て直した。

何度も瀧に電話をするが、不在案内の音声と、メッセージ録音の応答ばかり。

それでも、何回も、危険を知らせるメッセージを残した。

「会社からも、瀧さんに連絡してもらつたけど、やっぱり応答無し、だつて。」

「きっと、もうホテルを出て、車に乗っているんよ。山の中の運転中は、電波が届かない事があるって、瀧君、言うとったもん。でも、こんなに長い時間、通じないなんて。」過ぎて行く時間が遅く感じられた。1秒でも早く！、気持ちは高まるばかり。

通話可能エリアから戻った初見。

「駅に着いたら、すぐにレンタカーを借りられる様に、手配しておいたよ。場所は、僕は何度か行つてるから、分かるよ。

瀧さんのホテルから、現場までは、2時間くらいかかる、って言つてたんだよね？この始発と、駅からの山道のルートで、車で追いかければ、瀧さんにきっと追い着くから、三葉さんは、少し休んで。」

「ありがとう、何から何まで、。」

初見君の口から『三葉さん』なんて、何だか変な感じ。今まで通り『宮水』でええんよ。』

「あ、そうだね。瀧さんの事を考えたら、三葉さん、になつてた。

じゃあ、僕は、『りん』で。下の名前でいいよ。周りからも、下で呼ばれる事の方が多いし、。」

三葉はやつと、少しだけ気持ちが緩んだ。
仕事の書類だろうか？

隣でレポートの様な物を書き続けていた初見を横目に、着ていた上着をブランケット代わりに掛けて、眠りに着いた。

第八章

第8話

「三葉さん、宮水、そろそろ着くよ。準備して。」

初見に声をかけられ、三葉は目を覚ました。

「はい、これ、上着。寝ている時に、何度も落としてたよ。」

「あ、ありがとう。お陰で、気分が良くなつた。」

新幹線を降りてすぐに、予約しておいたレンタカーに乗り込み、山道を急ぐ。
「この調子で走れば、きっと間に合う！」

「うん！」

願いを込めたうなづきだつた。

それからは、ただ、ただ、瀧の車に追い着く事を信じながら、車内は自然と、緊迫した空気が漂つていた。

終始、無言でいた2人だったが、初見が話し出した。

「僕ね、父親と会った事がないんだ。自分がまだ産まれる前に、事故で亡くした、。瀧さんと、宮水も、子供が生まれたら、父親、母親になるだろ？」

その時に、最愛の人を失つた悲しみと、父親と会う事が出来なかつた、子供の寂しさを、三葉さんには味わつて欲しくない！って思つた。」

「りん君、、そんな事があつたんやね。だから、「

：一瞬、なぜ、初見が妊娠に気付いたのか？

不思議に思つたが、彼の真剣さに、特に気にしなかつた。

「絶対に、、助ける、」

初見が呟く。

かなり急ぎ気味だつた車のスピードが落ちた。

丁字路にぶつかり、いつたん止まつた。

右折方向には、立ち入り禁止のコーンが置いてあつた。

「思い出したーーここはまだ、左側へ廻る道路だけしか開通していしないんだよ。

でも確か、この右の道と、最終的には合流していく、開通後は、こっちの方が現場へ行くのには近道になるつて聞いた。

後は整備とか登録とかを残しているだけで、実際には、もう走れるらしい。

こっちから行こう！」

コーンを避けて、初見は、急いでエンジンをかけた。シートベルトを、キツく付け直した。

少し走った所に、緊急時の停車用のスペースと、緊急用の公衆電話が設置してある場所があった。

初見は、再び車を止めた。

「三葉さんは、ここで降りて！」

「え？ なんでやの？」

「ここから合流地点まで、あと少し、時間的にも、きっと先回りが出来る。でも、かなりスピードを出す事になると思う。

必ず連絡するから、ここで待つてて。」

「でも、そんな」

三葉は、初見の言う事が、直ぐには飲み込めず、聞き返したが、

「いいから！ 早く降りて！！」

と、これまで見たことが無かつた初見の強ばつた表情に驚き、荷物を持って車を降りた。

「無茶しないでね。」

「必ず瀧さんを助けるから、」

僕の事は、心配しないで。」

初見は、すぐに車を走らせた。

三葉は、何か、とてもイヤな予感がして、その場で待っている気持ちになどなれず、初見の指示を無視して、車が行つた方向に走り始めた。

初見が、無茶な事を考えているのでは？：と、

三葉の足も、自然と速くなつて行く。

一方、初見は、瀧が通過するであろう、合流地点を目前に、なお、スピードを上げた。
「よし、瀧さんよりも、先回り出来たはず、」

合流地点は過ぎた。瀧が通つてくるはずの道に入り、数十メートル走つた所で、、

キキーーッ!!!

わざとカーブしながら急ブレーキをかけて、道路を真横にさえぎるように、車を横転させた。

：その数分後、、

瀧の運転する車がやつてきた。

「な、何?!」

目の前で横転している車に驚き、車を止めて出て來た。

「大丈夫ですか？」

運転席を除き込み、

「は、初見さん?!」

更に愕然とした。

第九章

第9話

横転した車の運転手が、初見である事に驚く瀧。

「早く！ 救急車を!!」

ケータイを探す。

「な、無い?!」

ケータイが無い事に気付いて焦る瀧。

「どこかに忘れてきたのか?!、なんで今まで、無い事に気づかなかつたんだ!!」

悔しそうに、辺りを見回す。

「とにかく、初見さんを。」

横転した時に、シートベルトで体が固定され、助手席が下になる形だつたお陰で、頭を打つたり、流血などの傷も無さそうだ。

幸い、ガラスも、運転席側と、フロントは割れていなかつた。

すぐに初見の身体を、車から引きずり出して、少し離れた場所に、自分の上着を敷い

三葉が瀧の腕の中で、ブルブルと震え始めた。

「ま、まに、間に合つたんや、。」

「三葉、」

「生きてる！瀧君、生きてる！！」

三葉は、泣きじやくりながら、瀧の胸に顔を埋めた。瀧は、まだ戸惑いが抜けきれな
い。

しかし、三葉はすぐに我に返つた。

「りん君！」

「りん君？」

「りん君は？！」は、初見さんは？」

三葉が、少し離れた所で瀧の上着の上に横たわる、初見を見つけて駆け寄つた。
「無事なの？」

「早く、三葉のケータイを貸して！救急車を呼ぶから。」

「りん君！りん君！」

必死に呼びかける三葉。その声に、少しだけ反応して、

「父さん、」と、三葉には聞こえない位に小さな声を出した初見だが、まだ気がつかな
い。

三葉は、初見が自分を置いて、一人で行つた時の事を思い出した。

三つ葉は、初見がその時から、何らかの無茶な行動で、瀧の車を止めるつもりだつたのだ、と分かつた。

そして、立ち上がろうとした途端、瀧が助かつた安堵と、初見の姿に対するショックとで、そのまま倒れ込んでしまつた。

瀧の腕に抱き止められた事と、遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音を、うつすらと感じながら、。

真つ暗闇の中に、瀧の声だけが聞こえる、

ここは、とある病院のベッドだ。

「三葉！ 三葉！」

三葉の手を握り、瀧が名前を呼び続けている。

この世に、これ程まで自分を安心させてくれる声と、温かく、大きな手があるのか、そんな声と、手の感触を実感しながら、三葉がゆっくりと、目を開けた。

「三葉！ 気がついたか？」

「瀧君だ！ 本当に、瀧君だ！ 生きてる！ 目の前にいる！ 、

三葉は、体を起こすなり、枕元で、イスに座つていた瀧に抱きついて、

「良かつた！ 良かつた！」
と、泣きながら何度も言つた。

「お、おい三葉、そんなに泣いたら、俺の肩が、ぐちよぐちよになっちゃうよ。、
それに、何？ 山で会つてからずつと、俺の事、『生きてて良かつた』つて、、？
しかも、なんで、あんな場所に来ていたの？」

瀧に話しかけられて、落ち着きを取り戻した三葉が、瀧の目を見ながらゆっくりと
話し始めた。

「瀧君、信じられへんかもしらんけど、私、また、時間を超えたんだと思うんよ。 さ
かのぼつたの。

今回は、入れ替わりは無かつたんやけど、昨日の夜から、もう一度、その日の朝に戻つ
て、一日をやり直したんよ。」

三葉はまた、涙をぬぐい始めた。

瀧は、三葉の肩に手を添えて、背中をさすりながら、

「、で、変わらなかつた場合の運命つて、俺、死んでたんだね。
あの地震の時に通るはずだつた、あの先にあるトンネルで、、」

「どうして、その事を？」

「三葉がここで眠っている間に、一緒に現地で合うはずだつた人から聞いたんだ。

あの時の地震で、ちょうど、俺が通りかかっているはずのトンネルの真上の岩盤が崩れて、

直撃を受けたか、崩れたトンネルの屋根に押し潰される大事故に、巻き込まれていた
そうだ。」

瀧の表情が冷めて行く、

「、あの手前で、初見さんの車が横転してなかつたら、今頃、俺の後から、同じト
ンネルに向かつた車も一緒に、でも、あんな無茶、三葉が計画した事なのか？」

「あ！、りん君はどうなつたの？！」

三葉が焦つて聞いた。

「初見さんね、今はまだ安静で、面会は出来ないけど、でも奇跡的に、かすり傷程度で、
少しづつ、気がついて来ているみたいだよ。」

「良かつた、本当に良かつた、。」

りん君がね、昨日の朝早くに、うちへ來たの。

瀧君が行く場所に、地震の予兆が出たけど、どうしても瀧君に連絡が取れないから、危
険を知らせに行こう、て、連れて行つてくれたんよ。それに、」

他にも、初見に世話をなつた話を、瀧に聞かせようとも思つたのだが、「でも、先生の話だと、この事故の事や、三葉と一緒に来た事とか、殆ど覚えてないみたいだよ。」

「え?!」、でも確かに、

三葉は心配したが、覚えているかどうか?はともかく、とにかく無事で良かつた、と心から安心した。

そして、瀧に言わなければならぬ事があるのを思い出した。

「瀧君、あのね、」

頬が桜色に染まつた。

「赤ちゃん、できたんよ。」

顔を上げた三葉の瞳を、まじまじと見つめて、一瞬、ポカンとした瀧。

「えっ?!」

「瀧君。お父さんになるんよ!」

瀧は、まだ言葉が出さずに、三葉を見つめたまま、その目から、涙が一筋、ツーッとこぼれ落ちた。

息をするのも忘れているかのような、沈黙から一転、

「やつたあー！ 三葉、やつたあー！」

瀧は、両手の拳をグッと握り、頭を上下に何回も振り、まるで、物凄く大きなくじ引きの、大当たりでも獲得したのかと、思わせる程の、力のこもつた喜びを、三葉に見せた。

この病室が個室で良かつた、。

そんな風に思う三葉を、思い切り抱き締めた。

「ありがとう、三葉、俺を父親にしてくれて、」

瀧が三葉の耳元で言つた。

その感謝の伝わる温かさ、抱き締めてくれる力強さから、瀧がこのニュースを、心から喜んでくれているのだ、と感じられて、三葉は幸せだつた。

「それを言うなら、私だつて、」

三葉が自分を抱き締めている瀧の腕を降ろし、その手を両手で包み込む様に握つた。
「ありがとう。お母さんにしてくれて、」

三葉の頬にも、涙が伝う。

瀧の優しい声で、

「元気な赤ちゃん、迎えようね、」

(場面は暗転する、)

(10カ月後) の文字が出る)
：そして、季節が移り変わり、冬の空に、寒さを打ち消す様な、元気な赤ちゃんの産
声が響く。」

第十章

第10話

「お疲れ様、三葉、ありがとうございます。」

ベッドに寝かされたまま、分娩室から病室に戻ってきた三葉。すぐに起き上がり、出産の大変さはまるで無いみたいに見えた。

瀧が、三葉の頭をポンポンと撫でながら、優しく微笑みかける。

2人は病室で、赤ちゃんが来るのを待っている。

「出産って、思つとつたより、全然楽やつたわ～。　スルッと出て来た感じ。　テレビドラマで見てたんと、違かつたわ。」

「とにかく、母子共に健康で、良かつたよ。」

この病院は、父親の立ち合いをやらない方針だから、この部屋で待っている時間が長かつたー。」

「聞いたら、立ち合いの途中で、血を見て倒れちゃうお父さんがいるらしいんよ。それで、立ち合いをやめているんやで。」

以外と瀧君も、倒れるんぢやう？」

三葉が笑つた。その笑顔を見て、瀧もやつと、ホツとした。

「赤ちゃん、足型を取つたら、部屋に連れて来てくれるんやで。」

「早く抱きたくて、たまらないよ。」

「もう、聞いてるよね？元気な男の子やつたよ。」

名前は、2人で赤ちゃんの顔を見てから決めよう、って言つてたよね？」

私、まだ思いついてないんよ。瀧君に似て、優しいイケメンになつて欲しいなあ。」

「三葉に似て、温かい人になつて欲しいな。あ、少しとぼけた所も似ちゃつたりして、
ははは。」

「あー、瀧君てば！」

2人は笑いあつた。

「あ、そう言えばさ、」

瀧が、思い出したように言つた。

「頼まれていた着替えなんだけど、

退院する時に、何か羽織れる上着つて。

三葉のクローゼットを探したんだけど、上手く選べなくて、取りあえず、奥の方に掛

かつているヤツなら、会社に着て行く事は無いと思って、。これ、持つて来てみたよ。紙袋から、瀧が取り出した上着は、三葉が初見と、瀧を助けに行つた『あの時』に着ていた物だつた。

瀧は、もちろん、三葉も、それを忘れていた。

「それでさ、これを出した時に、内ポケットからこんな物が落ちて、」瀧が、小さく畳まれた封筒を差し出した。

『三葉さんへ、りん』って書いてあるから、もちろん、開けたりしてないよ。と
にかく見てみて、』

「りん君から？ 何やろ？」

三葉が手紙を受け取り、開けようとした時に、病室のドアがノックされて、赤ちゃんが運ばれて來た！

三葉は、手紙を無意識に枕元に置き、「来た!!」と目を見開いて、ドアが開く様子を見た。

瀧も同じ目で見ていた。

看護師さんの腕に抱かれ、真っ白なおくるみに包まれて眠る赤ちゃんが、そーっと、三葉に手渡された。

「おめでとうございます。さあ、ママに抱っこしてもらおうね。パパも来ててくれた

よ、。」

『ママ』『パパ』と、初呼ばれて、感激と同時にドキドキする瀧と三葉。
「、なんて綺麗な、透き通るピンク色の肌、いい匂い、かわいい匂い。かわいい
感触、」

赤ちゃんの、全てが愛しい。そんな気持ちで、腕に抱いた我が子を、真っ直ぐに見
つめる三葉。

その姿が、全く化粧をしていないにも関わらず、
「本当に綺麗だ、。」

と、心の中で感動して、瀧は、見とれてしまつた。
「ほら、パパも、抱っこしてあげて！」

瀧の腕に手渡された、小さな重み、。

でも、初めて感じたズーンと響く重さ、。

そして、全てを自分に委ね、信頼しきつてくれている、その寝顔に、瀧の目に涙が溢
れてきた。

「す、凄い。」

三葉が、瀧の涙をタオルで拭いながら、
「ほんま、凄いやろ？」

この、たつた一瞬で、この子の為なら命をかけられる！ 絶対に、幸せにしたい！！つて思われるオーラを、赤ちゃんつて、持つとるんよね、。」

2人が赤ちゃんに見とれている最中、三葉のケータイが鳴った。

この着信音は、、三葉の父からだ！

応答するなり、父は、、

「三葉か？！ 父さんだ！ 産まれたのか？！ どうなんだ？ 男か？！ 女か？！」 、かなり興奮しているのが、声を聞いただけで分かつた。

「ほら、お父さん落ち着いて、今、顔を見せるから、元気な男の子やよ。」

三葉がテレビ電話に切り替えて、瀧に抱かれている赤ちゃんを、アップで映した。こんな騒がしい中でも、スヤスヤと良く眠っている、。

父は、画面の向こうで涙ぐみながら、、

「なんてしつかりとした眉毛と、キリリとした目元！ 鼻筋も良い！！

きっと、この子は、真っ直ぐに、凜とした人生を歩む立派な男になるに違いない！！」

、と、息を荒らげて言つた。

第十一章

第11話

「もう、お父さんたら、まだ産まれたばかりやのに、もう人生の歩き方なんて話して、」

「この子の人生はこれからや。」

そんな三葉の言葉を、父は聞かずに、

「そうだな、この子の感じなら、名前は、」

父が言いかけた時、すかさず、三葉がさえぎつた。

「あ！名前ね、決まつたらすぐに連絡するから、一度切るよ。ミルクをあげる時間やし、」

そう言つて、強引に電話を切つた三葉。

「な、何も、そんな風に切らなくとも、」

瀧が心配そうに言うが、三葉はカラリと、

「ええの、ええの！へタに、お父さんが出した名前の候補なんて聞いたら、後から、

どれに決めたか？つて、確認の嵐やし、：

事あるごとに、俺が名付け親だ！！つて言い続けるんよ。、たまらんわ！」

「そうか、、三葉がそこまで言うんなら、、」

瀧が、赤ちゃんの顔を見ながら、ふと気づいて、：

「あ、そう言えば、名前つて聞いて、思い出したんだけど、、

三葉、初見さんの事を『りん君』つて、呼んでいたよね？」

「あー、そうやね。だつて、初見君が、『りん』で良いよって、、」

「それでさ、最近、会社で見た書類の中に、初見さんの名前がサインされている所があつて、なんか気になつてたから、改めて見てみたんだけど、、」

「何？」

「初見さん、、『救（たすく）』つて言う名前だつたよ。

すぐに読み方が分からなくて、ケータイで調べたし、珍しいから、印象に残つててね。

：三葉が『りん君』つて呼んでいたのを思い出して、聞いてみようつて思つてたんだ。」

「え？たすく、、？

私と初見君ね、小学校で同じクラスの時に、『みつは』の反対は『はつみ』つて、友達に、からかわれた事があるんよ。

それで、「はつみ君」つて苗字の方ばかり呼んでいたし、、

良く考えたら、下の名前、良く覚えとらんかつたわ。、でも、、なんでやろう？、「

「、何か訳が？、「

じやあ、『りん』つて、誰なんだろう？、「

2人が顔を見合させた時、三葉が思い出した。

「さつきの、りん君からの手紙！、「あれに何か、」

枕元に置いた手紙の事を思い出して、すぐに取つた。

「瀧君、呼んでくれる？」

赤ちゃんは、私が抱っこするやさ。」

そう言つて、赤ちゃんを受け取り、瀧に手紙を渡す。

「じやあ、開けるね。」

瀧が、横に三つ折りに畳まれた白い封筒から、手紙を取り出した。

中には、レポート用紙に、びつしりと、走り書きながらも丁寧に、数枚つづられた手

紙が入っていた。

瀧が、声に出して読み始めた、、

『立花三葉さま、』

第十一章

第12話

：（※小さなBGMで、『なんでもないや』の「もう少しだけでいい」、から始まる方の曲が流れます。）

：、この手紙を読んでいる時、どうか、あなたが、元気でいてくれますように。
瀧さん、初見さんと共に、それが一番の願いです。

三葉さんには、少し話しましたよね？

僕は、生まれる前に、母のお腹の中にいる時に、父を事故で亡くしました。
でも、本当は、この話は、初見さんの生い立ちではありません。

初見さんの体をお借りしている、この僕、『りん』の事なのです。

、とにかく、まずは話を、聞いて下さい。、

読んでいる瀧も、聞いている三葉も、一瞬、目を見合わせたが、すぐに続けた。、
(※ここからは、読み手の声が、瀧から、20代の青年の『りん』へと変わります。
場面も、りんと、その母親との回想シーンが流れます。

小さかつた、りんを見守りながら、父親の死の悲しみを乗り越えながらも、明るく振る舞う母親。

2人で力強く、深い絆で結ばれながら生きてきた様子が、手紙の内容と共に、映し出されて行きます。」

：「それでも母は、いつも幸せそうに、父との思い出を、僕に話してくれました。母は、父を、心から愛していました。

でも、年に一度だけ、父の命日に、車で事故現場の近くまで行き、手を合わせる時だけは、泣いていました。

そして、いつも言うのです。

「私が、あなたの父さんを助けられなかつた。
私は助けてもらつたのに。」

子供の頃は、その意味を、特に聞く事はありませんでした。

僕が高校生になつた時に、母は、今までに話した事のない話をしてくれました。
とても不思議で、誰も信じられない様な話だから、誰にも話した事がない、と話し始めてくれました。

：母が、高校生の時に、同じく、高校生の時の父と、体の中身だけが、入れ替わる体

験をしたのだ、と。、

瀧の読む声が止まつた。

三葉も、息を飲んだ。

2人とも何も言えず、一瞬、視線を交わして、すぐによまた、瀧は、続きを読んだ。

、、父と母は、同じ年の、高校生ではありましたが、不思議な事に、父の方だけが、母が生きている時間よりも、3年、先の世界にいました。

だから父は、母が住んでいた村が、入れ替わった頃から、その後に、彗星の落下、衝突によつて、消滅してしまう事を知りました。

どうしても、母の事を助けたかった父は、奇跡的に、もう一度だけ、彗星が衝突する前、つまり、まだ生きている母との入れ替わりに成功して、村の皆を避難させ、母と母の家族と、村の殆どの人達は、運命が変わり、助かつたのだ、と、語ってくれました。僕は、あまりに良く出来たSF小説の様で、最初は、信じられませんでしたが、普段、こんな話はしない母が、真剣な目で話すのを見て、信じました。

父の事故後、母は、自分も何とか、事故に合う前の父の体に入れ替わり、事故を食い止めたい、と願い続けていました。

父が、最後に奇跡の入れ替わりを願い、それが叶つた、『神社の御神体のほこら』に、僕を連れて行つてくれた事もありました。

そして、父がしたのと同じく、祈つたけれども、何も起こらなかつた。だから、母が泣くときは、哀しみの他に、悔しさの涙も流していたのです。そんな母を見るうちに、成長した僕は、

今度は自分が、その奇跡で、父を助けたい！、と、思うようになりました。

なぜ、初見さんと入れ替わったのか：

初見さんは、父の会社時代からの付き合いでした。

父が亡くなつてからも、初見さんは、僕と母を、まるで身内のように良く心にかけて下さいました。

地質学などの分野に興味を持った僕は、高校生の時から、将来、初見さんの様な仕事がやりたい。と思うようになり、しょっちゅう、初見さんの仕事を見せてもらつたり、手伝つたり、時には、出張にも動向させてもらいました。

だから、もしも、本当に入れ替わりの奇跡が起こせるのなら、初見さんになりたい。初見さんになれれば、母も、そして父も、疑うことなく、初見さんの言葉を信じてくれて、あの日、あの場所へ行く事を、食い止める事が出来るかも知れない。、

そんな計画を立てて、僕は、あの『ほこら』へ向かい、中へと入り、願つたのです。一瞬、目まいを感じたところまでは、覚えていましたが、

目覚めると、初見さんの体になつていました。
日付は、あの事故の日の早朝。

夢か？現実か？ハツキリしないまま、とにかく、瀧さんのケータイに電話を入れましたが、繋がらませんでした。

すぐに、初見さんのケータイや、スケジュールなどを調べて、その日が瀧さんが事故に合う日であることが、わかりました。

すぐに、自分が生まれ育ったマンションへ急ぎ、母に話をして、一緒に始発の新幹線に乗りました。

僕が、一人で行く手もあつたけど、母に行かせてあげたかった。
それから後は、

僕は、父さんを助ける為なら、どんな無茶でもするつもりです。
初見さんの体を借りて、いるのに、

本当に身勝手だと思います。

でも、どうしても、父を助けたい。

三葉さん、いや、母さん。

無事ですか？

父さんは？ 初見さんはどうなりましたか？

皆さん、とにかく今、元気でいてくれる事を、なによりも願っています。
そして、母さん。

どうか僕を、産んで下さい。

今度は、父さんも一緒に思い出を、たくさん作つて下さい。

最後に一つだけ、ワガママなお願いを聞いて下さい。

三葉は、大粒の涙を流し続けている。

瀧も、泣きながら、読み続ける。

、出来れば、今度は、僕に弟か、妹を、。

母さん、たくさんの愛をありがとう。

父さん、すごく会いたいです。、

第十三章（最終話）

第13話

「、瀧が、震える手で、手紙を見直している。

「まさか、こんな奇跡が、もう一度、起ころるなんて、。」

「私に、時間を超える奇跡が起こつたんじやなくて、りん君が、起こしてくれたんやね、。」

「自分の人生を、ストップさせてまで、俺を救つてくれた、。」

瀧は、少しの間、一点を見つめていた。

三葉は、片手で、口を覆つた。

「瀧君を失つて、一人で子供を育てて生きていく私なんて、考えられんよ。

どれほど、涙をこらえたの？　どれほど頑張ったの。　何度、心が折れそうになつたの？、

「今私のには、とても、。」

瀧が、三葉の隣に座つて、肩に手をまわす。

「別の時間で頑張つて來た三葉も、今、ここにいる三葉も、同じ三葉だよ。

守るべき存在があるから、頑張れるんだ。

三葉を見ていたから、三葉が母親だったから、俺を、命をかけて助けたい、と思う、強い子に育つてくれたんじやないかな、？」

瀧の言葉に、落ち着いた三葉。

「、どんな子やつたんやろ？ その時の『りん君』に、会いたかつたわ、」
「会えるさ、これから。」

今度は俺にもね。」

赤ちゃんを見つめる2人に、三葉の父の言葉が浮かんだ、。

「真っ直ぐに、凜とした道を、歩む男になるに、違いない」

三葉が、涙を拭つてから、赤ちゃんの、小さな手に、自分の人差し指を握らせた。瀧が、その2人の手を包み込む様に、優しく握った。

見つめ合つて、微笑む瀧と三葉。

、手を握る3人。そして、その赤ちゃんの姿だけが、画面いっぱいに映し出されてい

く。、

そこへ、瀧と三葉の声だけが響く。

「ありがとう、君の名前は、？」

（赤ちゃんの顔だけが、アップになり、）

『凜（りん）!!』

：：暗転する。

※本編の映画のラストと同じ様に、「2人の間、」から始まる『なんでもないや』が流れます。

エンドロールが流れる横に、その後の、瀧と三葉と凜の、思い出の写真が映し出される、。

赤ちゃんの凜に、てんてこ舞いな、三葉の様子。

泣いたり笑つたり、百面相みたいな赤ちゃんの凜。

公園で、凜と遊ぶ瀧。

瀧と、頬を寄せ合つて笑う凜。

初見さんに、化石を見せてもらつて、

興味津々の凜。

幼稚園の入園式、、

ほのぼのと、温かい風景。

そして、最後の最後には、、

こぼれる程の、幸せな笑顔を浮かべた凜と、そのすぐ後ろで、凜の肩に手を掛ける瀧。隣にいる三葉の腕には、、

柔らかな真っ白い、おくるみに包まれた、女の子の赤ちゃんが、抱かれていた。、
その写真で、ストップします。

それは、あの時の、凜の最後の願い、未来への希望が叶つた一枚なのでした、、。
（完）

『お礼と後書き』

ありがとうございました。

とにかく、ありがとうございました。

ここまで読んで頂いて、ただ、ただ、感謝の気持ちでいっぱいです。

初めての小説作成。

普段は、全くの素人で、一般主婦の私には、小説を書くノウハウや、知識もなく、とにかく頭の中に降りて来る言葉を連ねて行く事しか出来ませんでした。

その為に、読み手の皆様には、読みづらさはもちろん、稚拙な表現や、あり得ない展開、。

何より『君の名は。』を愛するファンの方々に、

「こんな事、瀧君は、やらない。」

「三葉は、こんな事は言わない。」

；等々、読みながら、不快に感じられる点も数多く。

更には、BGMや場面の解説も、煩わしく感じた方も、おられた事と思います。

原作者の、新海誠 監督を始め、皆様、申し訳ございませんでした。
しかしながら、もしも、この作品を通して、家族、パートナー、子供たち、友人、ペツ
トや、大切な物、

全てを含め、自分の周りに存在する、宝物への愛しさ、貴重さを、改めて感じて頂け
る事がありましたら、幸いでございます。

余談になりますが：

ラストの、凜からの手紙を読みながら映し出されていく回想シーンでは、

、高校生や、20代の青年の凜の姿は、やはり、父親である瀧によく似た優しい感じ
のイケメンで、

母親として、たくましく生きる三葉も、可愛らしさはそのままの、ピュアで素敵なお
母さん、、、そんなイメージを思い浮かべながら書いていました。

ストーリーの都合上、あえて、その場には、具体的な説明は書きませんでした。

読み終わつて

「あー、そだつたのか、」
と言う気持ちで、

「瀧君によく似た凜」

を、思い返して見て頂けましたら嬉しいです。

最後に、私の様な人間にも、自作の二次小説を、沢山の人達に読んで頂ける、この、
素晴らしい、夢のある投稿サイトを作つて下さいました、

『小説投稿サイト ハーメルン』様に、
大きな感謝の気持ちを込めて、
ありがとうございました。

平成29年 4月

えー・あーる夢見